

# 下町 ひし模様

六九

文・枝川 公一

えだがわ こういち 江東区南砂在住  
1940年東京生まれ「都市の歩き方」で都市歩きの新分野を  
著す。最近の著書は「街は国境を越え  
る」「東京のBar」「東京下町とっておきの  
人びと」「銀座四丁目交差点」「日本  
マティーニ伝説」「IT革命は幻滅なん  
かじゃない」など。

<http://www.edagawakochi.com>

寄席文字とともに、

遙かな江戸の昔へ 橋 右橋さん

江戸には寄席が二百数十軒

「寄席の看板やヒラ、高座の「めへり」でお馴染みの懸文字書体を称して、寄席文字と言つ。太々しく、隙間がないように書くのは、大入りになって寄席が閉閑なく埋まるとを願つてのことだ、という話もある。昔人にとって、はらはらの客たちを前にしたときはどうもさびしいものはない。そこで、縁起をかつき、文字に願いを込める。

この寄席文字、起源をたどれば、江戸の天保年間にはさかのぼるらしい。そのころ寄席が隆盛になって、手書きのヒラを街にまいた。

幕末の安政年間になると、江戸市中の寄席の数は二百数十軒を数えて、蕎麦屋の数よりも多いと言われた。日が暮れて部屋に明かりを灯すための油代よりも寄席の木戸銭のほうが安いというので、庶民は、自分の家を買つてしまったら良かったまま、寄席に通つた

そうである。

需要が多くなると手書きでは間に合わなくなり、木版刷りの板にヒラが出回って、ヒラ字と呼ばれる書体が定着したらしい。その後、明治、大正、さらには昭和の初年まで、ヒラは東京市中の寄席に欠かせない素材であった。

大正が昭和に変わるころ、前座の落語家のひとりが、ヒラ字の元種め的な存在の二代目ヒラ版のもとにおつかに来ていたうちに、この字に興味を抱き、独り修行に励んだ。

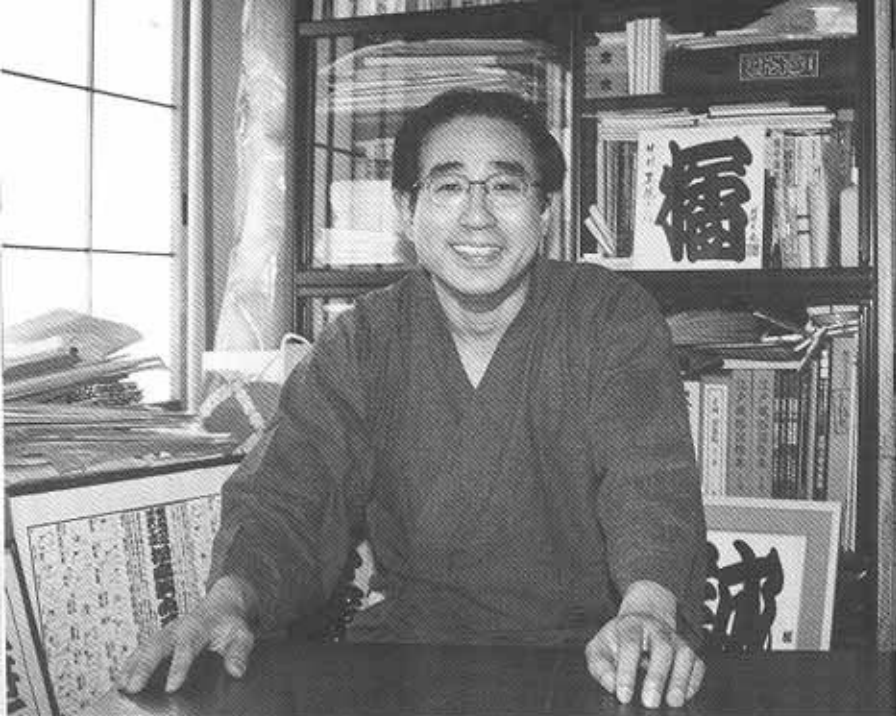
関東大震災について第二次大戦で、東京は壊滅的な打撃を受けた。戦全直後、寄席は少なくなり、ヒラ屋も廃業

する。先の落語家は、高座を下り、神田に残っていた寄席の楽屋主任をしていた。「主任」と言えば聞こえがいいけれど、太鼓を叩き、様面をつけ、進行も引受け、その合間に「ヒラ」も書へ、なんでも屋であった。

しかし、運命の女神とていつのは、いつとんときに微笑を向けてくれるかわからないもので、楽屋が次第に複雑してきて、看板書きの注文が次々に舞い込むようになって、大忙し。日本語の字体が新しくなったのにも関係して、読みやすい書体をつくらねばならなかった。

「ヒラ」字を寄席文字と命名したのは、この人で、私の師匠、橋右近です。戦後に高座を下りたのが運命の分かれ道。おかげでいまに名を残すことになりました。このころでは、そんな顔末を知るのは、漢字の内海桂子、落語の榎原小さんの間太夫くらいになりましたね。

と、江戸時代以来の寄席文字の口へ因縁を物語ってくれたのは、寄席文字の家元、橋右近の弟子にあたる橋右橋さんである。



右橋師匠の書室にて